

エッセイ集

確かに  
ここにいた

～1. 17を受け容れるまで～

喬城奈緒海(たかしろなおみ)

いま落ち着いて読んでみても、それが自分の作品には思えない。

記憶の中の

故郷（ふるさと）が

なくなったなら

またゼロから

記憶してゆけばいい

2017年1月17日付の上毛新聞1面の論説欄「三山春秋（みやましゅんじゅう）」。そのような畏れ多い場所に五行歌人・喬城奈緒海の震災を題材にした五行歌が、あの重厚な文面の中に違和感なく溶けこんでいる。

これは夢か？ いや、現実だ。

だが、その記事を読んでいて真っ先に思い出したのは今までの言葉にしがたいほどの壮絶な葛藤の日々だった。

（私って、何のために闘ってきたのか、闘った自分がバカみたい……）

そう、私は1995年1月17日の阪神淡路大震災で被災した群馬県民。それゆえに被災してからの2年を生きるのは容易ではなかった。

山あり谷あり地震あり。多少の疲弊は覚悟の上だが、これから私の心的な闘いの記録を綴っていくことにしよう。運悪く（？）この書をお手にして下さったあなた、ご一緒に22年の心の旅に出掛けましょう。

## イントロダクション・ひまつぶしの最終戦（前編）

---

今に至るこの物語を語る上で、どうしてもこのエピソードは外せないだろう。

1992年9月27日、何も予定がない日曜日だった。

その日はオリックス・ブルーウェーブの本拠地最終戦。自宅から市バスに乗り、市営地下鉄・名谷（みょうだに）駅からはたった1駅という好環境で生活していた。野球人としてはこれ以上ない贅沢な「暇潰し」。その日も「何（なん）もすることないから球場に行こか」ぐらいの感覚で向かったのを、今でも憶えている。

今でこそ「ほっともっとフィールド神戸」なる名前となっている神戸の球場、当時は「グリーンスタジアム神戸（以下GS神戸）」という名前で、家族にこの球場へ行くのを伝えるときにも「グリーンスタジアムに行ってくる」と言うほど、お膝元であり当時自分が住んでいた須磨区の生活環境に溶け込んでいる。GS神戸の最寄駅は「総合運動公園」。これは1985年に学生のためのオリンピックと言われているユニバーシアード神戸大会が開催された頃から存在している駅で、GS神戸と合い向かう形でユニバー記念競技場が建っている。補足事項として、この競技場は陸上メインだがJリーグのヴィッセル神戸の第二本拠地としても使われていることで有名。初めてJ1昇格を決めたのがそこという情報もある。

地下鉄に乗り総合運動公園駅で下車、球場までの距離はちょっぴり遠くに感じる。それもそのはず、自分が目指しているホームチームの外野席（2005年に楽天イーグルスの本拠地のホーム外野席をレフト側にしたことがきっかけだと思うが、今や「ホーム外野席」の概念はライト側と限定されなくなった。ここでは当時の概念であるライト側で解釈していただきたい）はレフト側ゲートを横目にしながらスロープで大回りしなければならない。さながら「登山」である。当時のオリックスの指揮官である仰木彬監督が近鉄に在籍していた時からの「仰木ファン」である私は、仰木監督が近鉄バファローズを勇退したのと同時にオリックスに「移籍」し、この日もオリックスの応援でライト側を目指していた。

ようやくライトスタンドに到着。本拠地最終戦の時節にしてはまだ暑かったのをほんのり記憶している。

毎回のように「先乗り」している観戦仲間たちと再会を分かち合い、早速グラウンドの練習を見ずに会話に興じる。当時の自分にはこのような人たちとの時間が、何よりの癒しであり宝物だった。毎回のように「先乗り」している観戦仲間たちと再会を分かち合い、早速グラウンドの練習を見ずに会話に興じる。当時の自分にはこのような人たちとの時間が、何よりの癒しであり宝物だった。

ほどなくしてからトイレか何かで自席に戻ってから、隣の席の男性に視線を奪われた。といっても、これは野球人ゆえの視線の奪われ方で、性的な興味という範疇ではない。

その頃はパ・リーグ応援サークルという特殊な集まりの代表をしていて、この日も何かしらのネタ探しに余念がない。しかし、隣の男性が法被・ハチマキ・リストバンドといったもので身を固めた「完全武装」ともいえるいでたちを目にしてからはそれを中断。私はいつものアホぶりを一旦封印してその方へ意を決して声を掛けることに。

「パ・リーグ応援サークルの者です」

今で言う「逆ナンパ」と見まがうようなアプローチだが、その方は照れながら笑顔を返してくれた。「完全武装」ということは熱心な常連ファンだということは自分が一番よく知っている。昔よくいた、よくスポーツを知らない女子アナとかがそういう人たちを見て「熱心なファンですね」と発することに対して「愚問じゃ、勉強せんかい！」と怒鳴るほどだ。

アプローチはそれで終わらなかった。本拠地最終戦ともなると（日本シリーズとかのポストシーズンがない限りは）来年まで本拠地での開催は無い。そのような事情から、

「どこからお越しになったのですか」

ずうずうしくも男性に尋ねてしまった。この咄嗟な質問に対して男性は清々しい声でこう答えた。

「群馬県から来ました」

ぐ、群馬！？ どこやねん？

一度も関西を離れたことがなかった私の大失言だ。だが、この大失言の元となった群馬が、のちに重要な存在になることを、その時は予想すら出来なかったのである。

## イントロダクション・ひまつぶしの最終戦（後編）

---

この男性は何か惹きつけるものがある。それが一体何なのか、その時は全くわからなかった。

と、そんなこんなで試合は始まった。

その日の対戦相手は、既に優勝が確定視されていた西武（現・埼玉西武）ライオンズ（3日後に東京ドームで優勝を決めた）。その当時、オリックスを応援しながら「近鉄脳」で「敵の中の敵」という解釈をしていたのはここだけの話だ。

自分の観戦仲間たちが思い思いに声を嗶（か）らしながら応援している。時折ヤジも飛ばしている。こんな当たり前の光景の中で、私ひとりの世界では隣の完全武装の男性の応援ぶりに釘付けになっていた。

群馬から来てくれたんだ、また来年でもご縁ができるといいな。

試合途中、私はおもむろにサークルの名刺を男性に差し出したが、イヤな顔をせず受け取ってくれた。そればかりか、ご自宅の住所を紙に書いて手渡してくれたではないか。

これは何かがある。

気が付けば、私は完全武装の男性に恋をしていた。

試合が終わってからはいつもの仲間とで三宮（さんのみや＝神戸の最大繁華街）で打ち上げをした記憶がある。だが、その記憶を遥かに凌駕するほどに、完全武装の男性の事が忘れられなかったのか、仲間にはそれを悟られないようにと振る舞っていたのかもしれない。

のちに彼は私の人生を大きく揺さぶる存在へと変わってゆく。

## 「その日」までの自分

---

本題に入る前に簡単な生い立ちを記しておこう。

1969年4月7日、私は神戸市生田区（現・中央区）の病院で生まれた。母から聞いたところ、体重は3000グラム台とそれなりにあったらしい。産まれてから4歳ぐらいまで暮らしていたのは長田区で、そばに長田神社がある。お正月には長田・湊川・生田各神社の初詣が「神戸の三社参り」と呼ばれるほど、長田神社は有名である。

物心が付いた頃に須磨区へ移住。幼稚園から20代半ばほどまでは、こまめな引っ越しを繰り返すものの、ずっと須磨区、現在も実家は須磨区にある。

あれから完全武装の男性は来シーズンからオリックスの東京応援団に入ることが決まり、それなりに忙しい思いをしていた。それなのに、私は彼が群馬在住であるにもかかわらず恋慕が強まるばかり。どうしてもこらえきれなくてその年のオフ（しかも年の瀬）に思い切って電話で告白をしてしまった。まだ携帯もSNS（さしずめポケベルか）もなかった頃の話だ。幸いにも彼はひとり暮らしだったのが救いなのだが。

告白の結果は「NO」。その時は彼にも思い焦がれている彼女が北海道にいた。しかし、告白の数日後に事態は急変した。

「実は彼女への思いは一方通行だということがわかりました、友達止まりにしてと。こんな自分でよかったですらお付き合いしてくれますか？」

一瞬呆気に取られた。彼と違って私は家族と暮らしていたため、母から何があったんだと難しい顔をして睨まれてしまった。だが、私の答えは決まっていた。

「ありがとうございます……」

その日を機に、私は完全武装の男性と交際を始めた。オリックスという共通項、私が本拠地の近くにいるという「環境」が（チームカラーである）青と黄色の運命の糸を手繰り寄せたのだと思う。

翌年から始まった応援団生活の激流に吞まれながらも、私たちは自分の地元の神戸・大阪で、男性の地元に近い東京・埼玉で出来る限り細やかな逢瀬を重ねてきた。自分自身も大なり小なりの激流はあったが、彼を失いたくない気持ちはずっと一貫していた。

「遠距離恋愛だから、結婚するなら3年ぐらい掛けたい」という自分なりのこだわりが伝わったのか、彼は私を群馬に迎え入れることを決断してくれた。1994年の夏ぐらいの話である。確かパ・リーグ応援サークルの福岡遠征の道すがら、彼を北九州方面に連れて行ってJR筑豊本線で中間（なかま）という小さな町に着く前までに車中でプロポーズさせた記憶があったなあ。あれは恥ずかしい思いをさせて申し訳なかったと、今ではそう伝えたくなる。中間は仰木監督の郷里、だから筑豊本線なのだよ。

と、そんなこんなで1994年11月下旬近くに、私は完全武装の男性と結納を交わした。私の実家での結納の席だったので、料理好きの母が京風の煮物などのご馳走をすべて手製で相手方の両親をもてなしてくれたのを昨日のように思い出す。

完全武装の男性……現在の夫である。

だが、幸せは違った意味で大きな黒い渦に吞まれていった。あの日のあの朝に。

## 地震が来た！（前編）

---

年が明け、1995年。晴れて将来の伴侶になることが決まった完全武装の男性は、当時毎年その日が「成人の日」と制定されていた1月15日辺りの三連休を利用して神戸に来ていた。初めて私の家に泊まったからか、家族への緊張が男ながらに可愛く思えた。彼は16日の昼に新神戸から新幹線に乗って帰った。残念ながら私は仕事で見送りに行けなかった。思えばこの判断が大きな悔いになることを、その時は知る由もなかった。

翌朝、休み明けで気合を入れて起きようとしたら、布団の下で何かしらの蠢（うごめ）きが始まっていた。「ん！？」

夢でも見ているのか……布団を被りながら蠢きのおさまりを待っていたが、蠢きはおさまるところか強い揺さぶりへと変わっていった。

そして揺さぶりから叩きつけるような衝撃へと変わり、家全体が激しく軋（きし）む。と、その時。「地震や、地震や!!」

2階から父の叫びが聞こえてきた。その時に地震と気付くには若かったというのか……

だが、バスの時間が迫っていたので状況を見捨てて会社に向かうことに。終点である名谷駅に着いて「さあ、行ってくるで！」と勇んで改札を目指そうと走っていったが、改札どころか建物全体が機能していない現実に直面した。

「なんでや……」

その時に初めて、私はあの朝方の衝撃で神戸がひどく傷つけられた現実を知った。

泣きそうだが、でも、泣いてばかりもいられない。

ここは真っ先にあの人へ……足はおのずと電話ボックスへと向かっていた。

## 地震が来た！（後編）

---

「もしもし……」

私はこらえきれず、完全武装の男性転じて婚約者となった彼にダイヤルした。出勤前という慌ただしい状況だけに出てくれるのだろうか……3回ほどのコールが終わったその時、彼に繋がった。

「もしもし、どうしたの？」

「神戸が、神戸が大変なことになってしもたわ！」

私の切羽詰った言葉を聞いても、初めは疑問符が脳内支配したんじゃないかというほど婚約者の反応は薄かった。しかし、彼が急いでテレビを点けて目の当たりにしたとたん、電話のトーンが一気に暗くなった。

「本当だ……神戸が火災になってる」

「か、火災！？ どの話や？」

地元の状況しかわからない私は彼の「火災」という言葉が、逆にみ込めなかった。動揺ぶりを悟られないうちにと、私は彼に出勤を促すようにしながら受話器を置いた。

（ここよりもっとヒドくなっとうところってどこや？）

彼から聞いた「火災」というキーワードが気になり、私は電話ボックスから出ずにそのまま勤務先へ電話した。

「おはようございます。いま名谷駅ですが、地下鉄が寸断されてそちらに行けません。どうしましょう？」

勤務先の方（たぶん事務所の主任クラス）は逆に、私のこのような状況を心配してきた。

「それよりもそちらは大丈夫なんですか？」

「まだよくわかりませんが、とりあえずは無事です」

このように答えるのが精一杯だった。結果、メンテナンスなどの関係上、勤務先から出勤命令が出るまでは自宅待機という決断が下された。先方も何がなんだかわからない状況だという。

地下鉄が寸断、勤務先からは自宅待機を命じられた……

次から次へとへこまされた心のままで、足取り重たく自宅近くへ行くバスに乗って名谷駅をあとにした。

帰宅した。家には仕事でいないはずの両親を含めた家族全員が居残っていた。と、その時。

「電気が点いたで！」

甚大な揺れで落ちたブレーカーを元に戻した瞬間、父が嬉しそうな声で叫んだ。あの朝方の衝撃とは正反対の口調でだ。だが、電気もガスも早々に復旧したついでに点けたテレビを見て、私は金縛りのように固まってしまった。

「新長田が、新長田が~~~~~!!」



## 激甚被災地・長田区の思い出

---

テレビの画面には、何度となく見たことがある JR 新長田駅前や菅原（すがわら）市場といった長田区の火災の様子が映し出されていた。母もやるせない表情でそれを見つめていたが、感傷に浸る間もなく相次いで余震が襲ってきた。

「あわわわわわわわわ!!」

まるですべての言語を喪失するほどの事態だ。度重なる余震を浴びてしまったことで、他人の貧乏揺すりすら震動と感じてしまう後遺症が生まれてしまった気がする。

数日後、この甚大災害に正式な名前が付いたのを知る。

「兵庫県南部地震」

1995年1月17日5時46分、震源地は淡路島に程近い明石海峡の海底。のちにそれは「阪神大震災」という名称に簡略化された。最終的な結果、最大震度7を記録した地域は長田区と中央区……どちらも『その日』までの自分」にて登場した区だ。こんな奇遇、ホンマに要(い)らんわ!

私と母が長田区の激甚被災に人一倍心を痛めていたのには大きな理由がある。同時にそれは我が家そのものとの大きな関わりにも繋がる、大事なお話である。

生い立ちの話に登場したエリアとはまた異なるエリアが、我が家に大きく関係している。阪神大震災の激甚被災地となった御蔵菅原（みくらすがわら）地区。両親が経営していた靴工場はそのエリアにあった。そこから川に向かって数分歩くと、あのアシックスの関連施設があったのも覚えている（アシックスの発祥の地は長田区）。

かつて一世を風靡した「そばめし」はこのあたりが発祥と言われている。長田区をはじめとする西神戸界隈は昔から靴の製造が盛んで、ゴム屋関連（靴関係の工員を長田では「ゴム屋」と言っている）が多いことで知られている。今は当時の工員が高齢化して数名ぐらいしか手作業が出来る人はいないというが、それと反比例するかのように通販などでの「日本品質」人気の影響で、工員たちの手作業で作られる靴の需要は高まるばかりである。

そもそも「そばめし」が生まれたのも、そのような環境が影響しているみたいだ。家にあるご飯の残り物を近所のお好み焼き屋に持って行って「焼きそばに入れて炒めてくれ」とお願いして作ってもらうのが「そばめし」。まさに長田発の庶民食なのだ。

菅原市場は我が家の「台所」といっても過言ではないほど、母が若いときから毎日のように勤務の合間に買い出しをしていた。それだけにその場所での大きな火災の映像を見るたびに母が勇んで買い物に興じていた姿が、今でもいの一歩に思い浮かぶ。当時の母の職業も、実は「ゴム屋」である。しかももうすぐ喜寿にもなるかという年齢なのに、いまだに現役バリバリのクラフトウーマンだ。それゆえに、震災でもろともに崩れた菅原市場に言葉を失くした。

実は震災前以来一度も御蔵菅原地区に足を運んだことがないが、もうそろそろ今の姿に会いに行こうと思っている。どんなに変わり果てても、菅原市場が存在していなくても思い出は消えないのが人としての性（さが）だ。少なくとも揚げたてのコロッケでよく利用していた肉屋は残っているのを公式サイトで確認できている。

須磨の家へ帰るときにバスに乗る関係で、のちほどの章で触れる予定の鉄人28号像が設置された JR 新長田駅界隈しか「現在の長田区」は確認できていない。出身地がそこ名乗っている以上、そこを愛するぐらいの気持ちが、今の私には必要だと感じている。そろそろ「1995年の呪縛」を解こうじゃないか。

もう一度言う、長田区が好きだ。神戸にありながら庶民の色が濃い長田区が好きだ。

きっかけとして菅原にあった（今は御蔵に移転した）肉屋からインターネットで肉を買ってみよう。今でも揚げたてコロッケあるかな？

## 結婚・神戸を離れる日

---

震災から数日ほど経ち、神戸の惨状が露わになってきたのをテレビで確認した。

倒壊・地割れ・液状化……

我が家は須磨区の坂が多い地区にあることから、被災具合は瓦が3枚ほど剥がれたのとバスルームに亀裂が出来たぐらいだ。ライフラインは水道が1週間寸断されていたことだけ。しかも我が家以上に被災が軽かった隣の北区にある祖母の親族宅に母の車で水を貰いに行ったので、その時期は大いに助かった。

日に日に明らかになっていく神戸の様子を見ていて、私はある心配をしはじめた。

(結婚はしばらく延期やろな……)

微少でも被災した立場だ、本当ならそんなことで思い煩うのは不謹慎だ。家族もそれを覚悟した。

ところが、ある日の婚約者の両親からの電話で事態は急変した。

「結婚は今年中にさせます」

これを聞いた両親が一瞬固まったのを今でも覚えている。それだけ昨年11月に結納を交わしたことを、震災があったにも関わらず大切にしてくれているのが嬉しかった。被災状況が激甚すぎて、その当時の神戸は相次いで結婚披露宴のキャンセルが止まらなかった。私も最悪入籍だけで群馬に引っ越すことも考えていた。だが、群馬側の心遣いが、当時の私には骨の髄まで沁みただ。それを励みに、様々な紆余曲折はあったが無事に結婚へと運ぶことが出来た。

震災から8ヶ月後、1992年の出逢いの日から3年という記念すべき日に、私は入籍して群馬県高崎市の人間となった。まだ身体は神戸にあるのだが、震災にすべてを砕かれることがなく結婚できることが決まったのが、何よりも嬉しかったのだ。

そして迎えた結婚式。日取りは「17日」にこだわらず仰木監督の誕生日・4月29日の月違いである10月29日。婚約者が応援団員、私も野球ファンという立場からシーズンオフというその時期に結婚式を設定したのだが、綿密に言えばその時期のオリックスはシーズンオフではなかった。9月19日、西武球場(現・メットライフドーム)でオリックス・ブルーウェーブは初優勝を決めた。そんな記念すべき年に、私たちは神戸で結ばれたのである。

神戸で生まれ、神戸で育って神戸から一度も離れたことがなかった私が、幸せな理由で神戸を離れることになった。だが、結婚式の最中で私は神戸を離れる寂しさとも、色内掛けの奥で闘っていたことを忘れてはいない。しかも、まだ復興の「ふ」の字すら明確化できていない時期だ。そりゃ離れることへの寂しさが膨大するわけだ。

結婚式の翌日、私は友人たちに見送られながら神戸発大阪経由で関東へと旅立った。長すぎる後ろ髪を引かれるような思いの私をおもんばかって「関西のことはうちに任せとけ！」と言わんとばかりの笑顔で見送ってくれたのが印象的だった。

閑話休題。オリックスの初優勝に因んで、婚約者とのこんなエピソードがある。

あと1勝でリーグ優勝になるという大一番を、たまたま婚約者と滞在していたハーバーランドという埋立地の商業施設の一角に用意されたモニターテレビを見つけ、そのまま二人で椅子に座って観ていた。

試合は「地元で決める」のプレッシャーに気圧(けお)されて千葉ロッテマリーンズに負けた。その瞬間が映し出された時、私を含めた神戸市民は一斉にうなだれたり「何やっとう！」とかの怒声を上げたりと、それぞれに悔しさを露わにしていた。

そんな中、婚約者が私の横でカバンから何かを出してきた。オリックスの公式戦日程表だ。

「次はっと……」

彼が日程表を開いた瞬間、「よしっ！」という声とともに小さくガッツポーズした。次の日程は9月19日、西武球場だ。

「ついに積年の恨みが晴らせる!!」

神戸という場所でその言い草はやめろよ……私は千載一遇の大チャンスに小躍りしている婚約者を妬んだ。

落ち着いてからその理由を聞くと、関東のオリックスファン、特に西武球場に通っているオリックスファンは西武ファンに長年虐げられてきたそうだった。私が近鉄ファンときはファンぐるみで西武を敵視して西武ファンを罵倒しまくったが、それは近鉄が大阪にホームがあるからできたこと。関東ではその逆だ。だから、関東のオリックスファンにとっては本拠地・神戸での優勝よりも関東、特に西武球場での優勝がかねてからの宿願だったのだ。

2日後、文中でも触れたようにオリックスは西武球場で初優勝を果たした。婚約者も応援団の一員として活躍しているのをテレビで確認した。この優勝は震災で傷ついた神戸への最大のプレゼントといっても過言ではない。

そんな年での結婚と神戸への別れだった。

## 群馬移住・いきなり冬支度

---

1995年10月31日。程よい長袖の服でも丁度いい神戸から一転、これから暮らしていく群馬県という場所は想像を絶する寒風が吹き荒れていた。薄着で上陸したものだから、当然のごとく骨身に沁みってくる。「まだ10月やろ！」

それもそのはず、群馬は独特の「からっ風」という雪になりきれないような湿気の少ない風が、当たり前のように吹いている。

関西では10月といってもまだまだ半袖でも平気に過ごせる気候の日が多かった。11月になってからやっと長袖になれるぐらい、秋の実感は遅いほうである。そのせいか群馬独自の「風物詩」にいきなり先制攻撃された。もちろんダメージは半端ない。しかもまだ神戸からの引っ越し荷物がほとんど届いていない。最初の二日間は最低限の厚着で過ごした気がする。

このような気候は、おそらく我が兵庫県では日本海側の、コウノトリがいる豊岡や温泉街で有名な城崎（きのさき）あたりの積雪地帯がそうではないかと想像できるが、雪になりきれないような独自の風は絶対そこには存在していないはずだ。

だから面食らったのだろう、想像を絶する群馬独自の気候。さながらいきなり冬支度といった感じだ。

この日以来、群馬での四季のサイクルは冬が異常に早く来ることを身体に叩き込まれたといっても過言ではない。

弱々しい「なんでやねん」が何度も私の口からこぼれた、群馬初日の心境である。

## 「職」より「食」に困った日々

---

群馬に引っ越してから一番困ったことは、実は「衣食住」の中でも「食」である。

本来は移住したときに一番心配するべきは勤務先なのだが、しばらく専業主婦で過ごすことになった現実では「職」より「食」の心配が一番の悩みであったことは、今だから書ける話だ。

「所変われば味変わる」という古くからの常套句がある。これは旅先での食事で実感することによく使われるフレーズだが、それが一生の住まいということになると、場合によっては苦になることも否めない事実である。

その洗礼は、JR高崎駅のホーム内で喰らった。

両毛線でどこかに出掛けようという時、お腹が空いたからと駅うどんを購入して暖を摂ったが、このうどんの汁が焦げ茶色とも言えるべき濃厚な色で面食らった。何より醤油辛い（ついでに麺の茹でも足りない）！

今でこそ諸事情により昆布だしがメインのうどんつゆが飲めない立場の私だが、昔はうどんつゆといえればキャメルというか黄色がかったベージュといった薄い色合いのものが当たり前だと思って過ごしてきた。現在は同じ群馬でも「うどんどころ」で知られる桐生（「きりゅう」。ここについてはのちほど別のエピソードでフィーチャーします）のうどん屋や駅そばでの茶色のうどんだしがいただけるようになったが、香川県発祥の讃岐うどんがメインで食されている関西から引っ越してきたばかりの私には屈辱的なカルチャーショックだ。

さらに、神戸に長く在住していた私ならではの「食ック」なエピソードも多く所有している。その最たるものが「ソース」の種類の乏しさだ。

古くから神戸は「ソースどころ」と呼ばれていて、今や「地ビール」ならぬ「地ソース」という呼び名も存在しているほど、神戸には多くのソースメーカーが、故郷の長田区を中心にひしめいている。前述のそばめしもその文化ゆえの副産物かもしれない。大阪のどこかのお好み焼き屋でも店主が神戸まで調達に行くほど、神戸のソースは人気が高いことで知られている。

中でも、母がよくお好み焼き用にとケチャップととんかつソースをミックスして作るソースの隠し味に入れている「どろソース」なるものが関東に無いことが、一番の「食ック」だった。どろソースは、神戸ではブランドとなっているオリバーソースの登録商標で、ソースの製造過程で生まれる一番辛いところを製品化したものである。一番辛いところはイコール一番美味しいところ。それゆえに余計な香辛料が要らない「隠し味」として多くのユーザーに親しまれている。

どろソースが高崎のどこのスーパーにも無くて、しばらくお好み焼きは仕方なく中濃ソースで過ごすしかなかった。それを察知した母から時々どろソースを宅急便で送ってきてくれたのが有難かったな。

20数年後の今は、流通が発達して近所のスーパーで売られるようになったのとインターネット通販のおかげでどろソースが簡単に入手できるようになったが、当時は本当に関東に移住したという実感をこのような形でさせられたのである。ホンマに神戸生まれはソースの存在にうるさい人種なんやな、私だけかもしれへんけど（笑）

## 群馬高校野球事情～初日～

---

兵庫県という土地柄ゆえか、気が付けば幼少の頃から高校野球の世界に足を踏み入れていた。「蔦（つた）の聖地」と個人的に呼んでいる阪神甲子園球場は西宮市にあり、昭和の高校野球史には兵庫県の高校が多数登場している。

甲子園へは阪神電車で神戸三宮駅から最短で約30分。高校球児の憧れにはいつでも行ける距離に、かつては在住していたことになる。

群馬へ移住してから高校野球の世界に入り込むには時間がかかった。嫁いだ身である遠慮もあってか最初からは貪欲にリサーチしようとしなかった。しかし、当時我が家が朝日新聞を取っていたからか、リサーチという労力を要さず群馬の高校野球へと足を踏み入れるきっかけはおのずとやってきた。それは夏の群馬大会の「檜（やぐら）」とか「山」……いわゆるトーナメント表が新聞に広告とともに入っていたことだ。

本題に行く前に群馬の高校野球事情について簡単に説明しよう。

夏に限らず春と秋の地区大会県予選（高校野球ファンの間ではそれを「春大（はるたい）」「秋大（あきたい）」と呼んでいる）は主に前橋の上毛新聞敷島球場、桐生球場、そして我が地元の城南球場が使われているが、それぞれの公式戦によって決勝の場所は異なってくる。春大が城南、秋大が桐生、そして最大に盛り上がる夏の群馬大会は敷島という持ち回りだ。だから5月の春大決勝やビッグネームが出てくる時の城南での試合は、球場周辺が違法駐車が多発で試合中にそれ関連のアナウンスが絶えない。

正直な話、それまで私は地元の県大会には一度も行ったことがない。甲子園のお膝元という「甘え」ゆえに

「どのみち甲子園で観れるから別にええわ」

などと言って兵庫の代表が決まる場面には一度も遭遇したことがない。

甲子園は観させていただくもの、という意識が、神戸在住の頃にはあったが、甲子園から遥かに離れた群馬ではその意識が存在させられない。ならば、どうしたらいいか……

高崎に嫁いでから4年後の1999年、私は意を決して夏の敷島へ行って見た。群馬での高校野球の熱を確かめに。

## 群馬高校野球事情～中日（なかび）～

---

1999年の敷島の話に入る前に、その前の年の高校野球での大きなうねりについてどうしても触れなければならない。1998年は高校野球の域を超えて社会現象になるほどの大ブームが起こった。1980年生まれの高球児が大活躍した、いわゆる「松坂世代」の大ブレイク。横浜高校のエース・松坂大輔投手（現・福岡ソフトバンク）を中心とした世代で、いずれも怪物・天才・巧打者のオンパレード。さぞかし当時の野球少年たちの心をときめかせたことだろう。

さて、翌年は松坂世代を超えるスターが生まれるのか……そのような期待の中で1999年の夏を迎えたが、私はそんなことよりも初めて生で観る群馬の高校野球そのものへの関心が先立っていた。

事前情報として、関西時代の友人から群馬に於ける「県立四高（けんりつよんたか）」を教わっていた。県立四高とは地元の高崎・県庁所在地の前橋・古くから「球都（きゅうと）」と呼ばれている桐生・スバルで有名な太田に所在している、旧制中学時代からの県立男子高を指す。群馬は高校野球に於いて公立信仰が非常に強く、県立四高のスタンドは甲子園にでも行ったかのような熱量が、夏の予選ごとに存在している。

しかし、この年の夏はそんな潮流が逆流するような出来事が群馬全土を震撼させた。

そろそろ本題に戻そう。

1995年10月末に移住してから群馬で暮らしていくことが精一杯だった私にとって、この年の高校野球との出逢いは「事件」以上に適度な言葉が見つからない。その「事件」をもたらしてくれたのが、なぜか県北部にある沼田という県立の男子高。「県立四高」には入っていないが、男子高ならではの勢いとパワーと迫力でひたすら盛り上げるスタイル。群馬の高校野球のスタンドを体験したのは、この高校が最初である。

沼田高校のセールスポイントの代表格・高速で全力な「アルプス一万尺」に魅せられてそこの応援が好きになったあまりに、私は彼等とともに沼田高校の初甲子園を夢見るようになった。今でこそ沼田という地名は人気アイドルグループ・乃木坂46のフロントメンバーの出身地として知られているが、全国的には無名だ。そんな所が初甲子園に向かって決勝まで進んだのだから、一種のロマンを感じる。

あの頃の感情ではうまく説明できないが、今思えばそれが「地方大会（夏の甲子園代表トーナメント）」の醍醐味というものだろう。兵庫県にいた頃では体験する機会が無かったゆえに、この感情は新鮮に感じた。

だが、沼田高校の壮大な夢は、優秀な左腕投手を中心とした強豪によって大量失点を喫させられた。スタンドも統制がとれていて、県での決勝にもかかわらず、今にも甲子園に行くような応援の凄さに、敵陣スタンドに居ながら衝撃を受けた。

こうして、沼田高校の初甲子園への闘いが終わった。

その対戦相手こそが、のちに県勢初の全国制覇を達成させた桐生第一高校である。



## 群馬高校野球事情～千秋楽～

---

県立信仰が強い群馬の高校野球という名の潮流が逆流するような出来事とは、まさにこのことだ。群馬はこの快挙を機に高校野球の地熱が上がったといっても過言ではない。

その当時は正田樹（しょうだ・いつき 現・愛媛マンダリンパイレーツ）という絶対的なエースを中心とした磐石のチームで、智弁和歌山、樟南（しょうなん）といった甲子園常連校に相次いで勝ち、決勝の岡山理大附戦では（その当時での）決勝戦に於ける戦後最大得点となる14点を叩き出して全国制覇へと駆け上がった。桐生第一に関してはもっと書きたいことがあるが、それはまた別のページにて。

しばらくはその桐生第一を中心に、群馬は前橋工をはじめとした公立群や東農大二などの私立群がしのぎを削るようになったが、そういった競争の中でじわじわと「古豪崩し」が進んでいることを、2010年代になるまでは予測もしていなかった。

2001年、高崎で馴染みのある老舗女子高校が急に共学化。翌年、そこに硬式野球部が誕生した。そのニュースを知ったときは、まだ甲子園の「こ」の字も想像できなかった。しかし、まだまだ桐生第一を中心とした勢力図は、それこそ磐石の形相だった。「公立復権を」の声が高まるのはそれから約10年ぐらいあとだった気がする。地元・高崎ではその声が殊更強くてちょっぴり閉口したほどだ。

そんななか、群馬に1999年以来のビッグウェーブがやってきた。

2013年、高校サッカーの常連として有名な前橋育英が夏の甲子園を全国制覇したのだ。

私はこの時確信した。群馬はいつでも全国制覇を狙える位置に行けると。

ほぼ同じ時期、前橋育英の躍進の陰でもうひとつの新興勢力が産声をあげていた。前述の突然に共学化した高校……高崎健康福祉大学高崎高校、通称・健大高崎である。大砲を打てる打者が少ないながらも甲子園で最高春ベスト4まで進めた原動力は「機動破壊」と呼ばれる脚を絡めた心理戦法。その斬新かつオーソドックスな戦法は群馬を飛び越えて全国の高校野球ファンを大いに魅了し続けている。その活躍ぶりを語るには枚挙にいとまが無いほどだ。

ここ数年の甲子園での我が兵庫県は全国制覇どころかベスト16にすら届かない成績が続いて落ち込むことが多い。2017年のセンバツでやっと報徳学園がベスト4という「お膝元復権」が実現したのだが、群馬での年数が神戸で暮らしてきた年数をもうすぐ逆転するであろう今は、とにかく群馬の高校野球の未来が気になって仕方がない。しばらくは健大・育英の二強時代だろうが、ひょんなところから公立・私立を問わず無名の高校が新興勢力として二強を脅かすことだろう。

いまだに春の全国制覇はないが三度目の全国制覇が叶ったとき、群馬は本当の強豪県と呼ばれるに違いない。少なくとも私の中では……。

## 駅伝と八木節が季節の主軸

---

元日の駅伝観戦と  
真夏の八木節踊りが  
すっかり  
群馬ライフの軸に  
なっている

数年前にこんな五行歌を作った。まさにその通り、真夏の超弩級の雷と真冬の尋常ではないからっ風に苦しめられる日々の中、数少ない楽しみを1月と8月に見つけた。

1月は「ニューイヤー駅伝」の愛称で知られている全日本実業団対抗駅伝。一年で一番早くに行われるスポーツイベントで、すっかり元日の風物詩となっている。私たち夫婦も高崎中継所周辺や県庁ゴールで全国から集まった、中には五輪にも選ばれたことがあるトップアスリートの力走を生で観たり撮影したりで一年の始まりを実感する。特に県庁ゴールは予定時刻の1時間前から場所取りでカオス状態だ。自分たちが必死で確保した場所にあとから前列へと割って入ってくる意地悪なご婦人方もいたり、テレビには映らないところで醜い戦争が起きている。なんとも情けない。それでもゴールシーンを撮影しようと、私は最低限でもデジカメでアンカーの行方を追っている。成功した試しはそんなにないが（笑）

8月は群馬ばかりか関東最大の夏祭りと言われている桐生八木節まつり。実は八木節との出逢いは桐生第一のホームインテマという意外な経路からだ。桐生人同様に本格志向ぎみの私は「八木節を本場で聴いてみたい」という思いから2002年に祭りを初観覧したものの、何年も通ううちに観覧だけでは物足りなくなり、マイ甚平を着用してまでも飛び入りしてメインの櫓の下で踊るようになった。それが高じてか数年後には桐生の八木節チームに入り、祭りのぼせの人生を現在もひた走っている。詳しいことはのちほど桐生語りのコーナーにてゆっくりと。

群馬での愉（たの）しみを見つけてからは、結婚して間もない頃のようなホームシックは軽減していった。「住めば都」とは言い得て妙だ。こんなにわかりやすい季節の主軸があることに感謝しないと。

## 宣告・聞き慣れない病名（前編）

---

本来、病というものは予兆というものが目に見えるはずなのだが、私が現在も闘っている病は予兆すらわからずに、気が付けば罹（かか）っていたという。2004年4月、風邪なのかよくわからない体調不良で高崎の大型総合病院に行ったが、診察結果は想定外な展開となった。

「喬城さん、なぜ半年前から放置してたんですか！」

そんなことを言われても……担当医は続けた。

「これは風邪とかじゃなく、甲状腺機能がおかしくなってますよ！！」

コウジョウセン、何やそれ？

その半年前にも私は風邪か何かで同じ病院に行って診てもらったが、聞き慣れない甲状腺という言葉のスルーして風邪関連の薬を持って帰るだけに終わった。しかし、この時はまるで最終警告のような形相で担当医が言ってきたのだから、よほどのことだろう。

担当医から「高崎ではここが専門だから行ってきなさい」と紹介状を書いて渡してきた。当時、まだ開院して間もなかったぐらいの内科医院だ。大丈夫かな……そんな不安もあったが、とりあえずその足で紹介された医院へ向かった。今でこそ群馬屈指の甲状腺専門医院と言われていて1ヶ月先でも予約が取れない医院だが、開院は20世紀の終わりということもありあまり知られていなかった。

外観はそんなに大きい感じではない。ここが私の「かかりつけ医院」になるのか……病院からの紹介状を受付に提出し、順番を待つことに。思えば「予兆」というものは過去にあったかもしれない。しかし、今ほど甲状腺への注目度や知名度がなかったせいも、それと気付くことができなかった。

「タカシロナオミさん、内科の診察室へお入りください」

順番が回ってきた。さて、何を言われるのだろう。病院からの警告から数時間しか経っていないだけに覚悟もへったくれもない。とにかく不安以上のものはそこにはなかった。

診察室に入った先にいたのは柔和な男性の医師、この院長だ。

「先生、私に何があったんですか？」

## 宣告・聞き慣れない病名（後編）

---

その声は焦燥感に満ちていた。顔も漫画よろしく、しずくだらけといった形相だ。しかし、院長は「落ち着いて聞いてください」という前置きもなく、穏やかな口調で重大な事実を告げた。

「甲状腺機能低下症です」

な、なに！？聞いたことがない病名じゃないかよ……今起こっている真実を院長から告げられ、私はしばらくその場を離れるのが怖くなった。

（なんでや、なんでや……！）

それでも生きていかなければならない、といういつもの空元気（からげんき）な言葉が、珍しく出てこない。ましてそのときは声がうまく出てこないほどの呼吸困難で、感情もボディランゲージでしか伝える手段がなかった。

ここで何回か登場した甲状腺について詳しく解説させていただく。

甲状腺は首の前側、のどぼとけのすぐ下にあり、形状は蝶が羽を広げているビジュアルという。この内科医院のシンボルマークも羽を広げた蝶で、さながら甲状腺の形状といったところだ。たて4センチ、厚さ1センチ、重さ15グラムぐらいの小さな臓器で外からはわかりにくい位置にある。甲状腺は食べ物に含まれているヨウ素を材料にして甲状腺ホルモンを作り、血液中に分泌するところ。人間の活動エネルギーを作るところとして存在している。ただし、甲状腺ホルモンは多すぎても少なすぎても体調が悪くなってしまうのだ。

待合室に戻り、お会計に呼び出された。初めてホルモン剤というものと対面した。これからの生活で絶対欠かすことが出来ない「命綱」の働きをもつものだから、一日も欠かすことが出来ない。また、その頃の自分の現実を、既に（体調悪化を理由に）退職を伝えている職場に持つていくために診断書も作ってくれたが、病名を見てもっと錯乱してしまった。

（橋本病って何やねん！）

橋本病とは九州大学の外科医・橋本策（はかる）博士が発見したことから付いた名前で、正式には「慢性甲状腺炎」。イライラする・運動していないのに鼓動が激しくなるバセドウ病（甲状腺機能亢進症）とは逆の症状で、無気力になる・食欲は低下するのに太る（＝むくむ）・皮膚がかさかさする・寒がりになる・脈がゆっくりになる・記憶力が低下するなど、いたって静かな症状ながらも自己免疫疾患という厄介な病気である。こんな一蓮托生要らんわ！ と心で思っている、時間がかかってでも元気になるためには一蓮托生するしかない。

私は診断書を握り締めながら闘病への覚悟を、渋々ながらも決めた。これは健康を取り戻すための闘いだ。ただ、橋本病に至った原因は自分でもいまだにわかっていない。きっと棺桶に入っても解明できないミステリーとなるだろう。

だが、そんな私に橋本病以上の地獄がやってきた。宣告から7年後の早春に……。

この章を脱稿しようとしていた頃に、近鉄バッファローズや夏の甲子園の実況で一世を風靡した元・朝日放送（大阪）の名物アナウンサー、安部憲幸氏が胃がんのため71歳でお亡くなりになりました。

近鉄ファンの頃はアベロクさんの実況が心のお守り、支柱でした。

突然の訃報を知り、いまだにこの事実が受け止められません。

安部氏のご冥福を心からお祈り申し上げます。

若き頃に猛牛魂をグレードアップしてくれて、本当に有難うございました。

## イントロダクション・関東に於ける「1995年」への意識

---

本題に入る前に、大事な出来事を話しておこう。

甲状腺疾患を宣告された2004年といえば公私ともに激動の年だった。公的にはプロ野球が大きく地殻変動した。オリックスと近鉄の合併騒動に端を発した球界再編の動きは、史上初のストライキや新球団を東北に誕生させるなど、良くも悪くもすべてが衝撃の連続だった。

自分自身の出来事は10月に左眼の手術をしたことだ。その時期はエッセイストになりたく公募をするために準備をしていたが、麻酔がなかなか切れない現状に苦しめられて小さな文字が書けなくなった。

しかし、その「辛苦」から思わぬ扉が開いた。五行歌との出会いだ。たまたま傍らにあった公募雑誌の1ページに載っている五行歌の公募の広告を見つけたとき、私はエッセイストの夢を「もういいや」と諦め、これまた傍らにあったブロックメモいっぱい文字を書いて自分の気持ちを五行で書いて書いて書きまくった。

(長文にしなくても心が伝わる文芸が存在している)

たちまち五行歌人・喬城奈緒海の誕生だ。今では自分を的確に表現しやすいツールとしてかなり活用している。

さて本題に入ろう。

私が(群馬に移住してからこんな名称に変わっていた)阪神淡路大震災の被災者であることは第1幕で長々と語ったが、その震災から2ヶ月ちょっと後に、東京では地下鉄サリン事件が発生した。実はこの事件こそが関東では1995年の重大ニュースとなっただろう。

その事実を1995年の年末に知るなり、私はひどく落ち込んだ。結局関西での出来事で片付けられたという意識が強まり、私は群馬で暮らす以上は被災者という事実を隠すばかりか阪神淡路大震災を忘却の彼方へと追いやり、何事もないように過ごすことを心に決めた。その方が群馬に慣れる近道だと信じて、初めの10年ほどは生きるようにした。楽な生き方を選んだという負い目など、微塵も思っていない。嫁いできた立場とはそういうものだ……母が好きだった当時の人気嫁姑バトルのホームドラマで叩き込まれた「常識」。それを隠れ蓑に、私は「兵庫県出身」と名乗っても震災の話には触れてもらわないよう、勝手に予防線を張り続けてきた。

だが、2011年の早春にそれが無駄なものだと思い知らされることを、当時の私は予想すら出来なかった。二度も同じ思いをすることを……。

3月11日14時46分（前編）

---

2004年に小千谷（おぢや）・長岡エリアで発生した新潟内陸（正式には「新潟県中越大震災」）、2007年に同じ新潟の日本海沿岸を直撃した中越沖、2008年に宮城県栗原市・岩手県奥州市で起こった岩手・宮城内陸……と、私が1995年に遭った阪神淡路大震災以後の相次いで起こった甚大な大地震の数々に、日本列島は「地震大国」という事実を改めて思い知らされた。

2011年3月11日、何の変哲もない金曜日の昼下がり。当時、高崎駅の駅ビルにて食品集中レジに従事していた私だが、その日はたまたま休日。春になっていくからそろそろ……という気持ちで美容室へと向かう準備を整え、余裕が出来たので二つ折り携帯でゲームを愉（たの）しんだりとかして過ごしてきた。と、そのとき。

（ミシミシ……）

突然、畳の床が泣き出した。

（グラグラグラ……）

ま、まさか……それでも平静を装ってスルーする。が、それでは終わらなかった。

（ガタガタガタガタ！！）

自分が住んでいる団地そのものが激しくシェイクしている。

「ぎゃ~~~~~、まだ死にたくない、死にたくない、死にたくない！！！」

もはや逃げ場がない……とにかく布団を被って揺れがおさまるのを待った。

揺れがおさまってから美容室へ電話をかけたが、通じない。やっぱりあの激しい揺れのせいなのか。とにかく行ってみよう……気が付けば足はおのずと高崎駅へ。しかし、駅に着いたと同時に、けたたましい館内放送がその場を支配していた。さらには、

「いやだぁ~~~~~！！！」

自宅で遭遇した激しい揺れから約30分後、高崎駅に再び激しい揺れがやってきた。

揺れがおさまっても、私は駅の高架下で柱にしがみついたまま。そればかりか、涙も出てきた。

「なんで、なんで2回も同じ目に遭わなければならないの？」

涙の理由は自分が一番わかっている。1995年の衝撃が津波のようにひどく押し寄せてきたからだ。事実、あの自宅でのひどい揺れにより、震源地付近では甚大な津波に呑まれる場面を、その頃に迎えていた。

震源地は宮城県三陸沖、内陸だと栗原市にあたる位置……東北地方太平洋沖地震、いわゆる「東日本大震災」。発生時刻は14時（午後2時）46分、私が遭った震災と「46分」の共通点が生まれたことになる。

高崎駅周辺は余震が続いていることから駅構内に入れず溢れ返っていた。職場は無事か、商品は（酒類も取り扱っていることから）割れたり破損したりしていないか……様々な心配も生まれていく中、橋本病の症状ゆえか無力感も顔を出してきてはなおさら苦しめられる。

こうした精神不安定を和らげようと、ひとまず駅近くのファミレスへ飛び込んだ。14時46分の本震から少し落ち着いてきたので、まずは市外で仕事している夫へ確認メール、その次には友人筋や夫の実家へメールや電話をしてみたが、なかなか届かない。ところが、数分後（いや、もう少し遅かったかな？）に見覚えのある三桁の市外局番から電話が来た。

「なおちゃん、大丈夫か？ 東北とか関東とかが大変らしいやん！」

母だ。母もあの震災で大変な思いをした。だから心配で電話をくれたんだな。普段は話し出すと「はよ終わらへんかな？」と心で呟きながら会話している私だが、このときばかりはそうも言うてはいられなかった。でも、静かに「ありがとう」と返すのが精一杯だった記憶がある。

時間の経過とともに、ファミレスにスーツ姿の人たちが多数押しかけてくるように入ってきた。聞けばその人たちは電車で出張応援か何かで市外から高崎に来ていた人たちだ、その時は地震で全線運休となっていて、高崎駅の改札口は完全封鎖。のちに「帰宅難民」という名称が生まれたほど、高崎だけでなく被災した各地で出張族がその日の帰りの足に困っていたとの事実は、後日のネットニュースで知った。

これで自分の震災の記憶が、良くも悪くも「更新」されたな……

今となってはとんでもない言葉と考えがあの日々の苦悶の空間の中で生まれていたのを、今は素直に告白できる。

ところが、「更新」どころにならないほど、私の心身はひどく蝕（むしば）まれていった。その日を境に……。



## 決死の献血と薬の危機

---

3月11日の本震から数日後、あるニュースをネットで見つけた。

(嘘だろ……)

そのニュースとは、甲状腺機能低下症にとっての「ご飯」ぐらいに大切なホルモン剤が生産されている工場(しかも国内シェア98パーセント)が東日本大震災の影響で生産どころか稼働停止になってしまったというもの(所在地は福島県いわき市)。幸いにも手元には約一ヶ月分のホルモン剤が残っているが、これが無くなったらと思うと先が思いやられる。

震災から約一ヶ月近く後、心配になった私は「宣告～」で登場した小さな医院へ電話で問い合わせた。ところが、電話の向こうの医療事務の声が心なしかトーンが低かった。

「申し訳ございません、ホルモン剤は工場の復旧具合を見て、(本来なら3ヶ月ちょっと分だが)とりあえず一ヶ月ずつの供給とさせていただきます。どうしてもという場合にはドイツ製の代用品……」

(は！？ドイツ製だと？ふざけんなよ！！)

重篤(じゅうとく)ではないとはいえ、人より多めのホルモン剤を毎回処方されている自分には死活問題だ。とりあえず製薬工場の復旧具合を見守ることにした。ところが震災から約1ヶ月後に工場が復旧し、供給も落ち着いてきたので、辛うじてドイツ産を受け取らずに済んだ。未遂に終わったが、この出来事は今後の災害に於ける教訓となったのは言うまでもない。

東日本大震災で医療関連といえば、このエピソードも忘れられない。献血に関する無茶な行動の話だ。

阪神淡路大震災で「誰にでもできる被災支援」として注目されたことから献血が災害と密接な関係であることが判明し、東日本大震災でも多くの人が献血で支援した。

当然だが、阪神淡路では「当事者」で献血までの心の余裕は無かった。だったら、今こそ恩返しを……。

そんな思いで、私は震災から一週間後に高崎駅の中にある献血ルームの扉を叩いた。

献血の前に、まずは血圧測定。その時、デジタルは想定外の数値を表示した。

(な、なんだこりゃ！？)

なんと、最高血圧が160という尋常ではない数値を叩き出しているではないか！

さらには献血中に(東日本大震災に起因した)福島第一原発事故のニュース映像が流れていたものだから、献血というよりは点滴みたいな場面にいるような心境だった。何とか献血は無事に終わったが、それに追い討ちをかけてきたのが一ヶ月後の定期健診だった。いつものように血液検査を受けたが、後日に院長から「これはマズイ！」という感じの口調で検査結果の電話が来た。甲状腺刺激ホルモンの最高数値の5倍に膨れ上がっているという危険事態が伝えられたのだ。

(何もかも、あの震災のせいだ！！)

もっとその状況について詳しく語りたいがキリが無いので、命という共通のキーワードのエピソード集はこの辺で止めておく。

## 計画停電よもやま話

---

阪神淡路大震災ではこんなことが無かった、という東日本大震災の事後対応として「計画停電」というのがある。計画停電とは電力需要が供給力を上回ることが予測される場合に、大規模な停電を回避するために、電力会社が事前に用途・日時・地域などを決めて電力の供給を一時停止すること。同じような意味合いで地域を区分して順番に停止する計画停電もあるが、それは「輪番停電」とのこと。もちろん信号などのツールなどの機器もストップするだけに、車社会には痛すぎる。

さらに地元ではガソリンの奪い合いも起きた。地元オイルターミナルがあるのと近所にガソリンスタンドがわりと多くあることから普段にはない異様な光景となってしまう、震災から一ヶ月後ぐらいまでは普通に買い物に行くにも渋滞に気を遣って行動しないと怖いという日々だった。満タンでも入れようものなら喧嘩を仕掛けられかねない状況だけに、電車の運行よろしく「間引き」状態でリッター制限とか金額制限とかの特別ルールが敷かれたのである。

さて、ぼちぼち計画停電の話題に入ろう。我が家は団地だけに号棟まるごと停電となってしまう。そんな時、夫はジムへ行って時間を潰すが、ジムにも行かない私にとってのオアシスは高崎駅東口のスターバックスコーヒー（以下スタバ）。その頃、高崎駅は東口がリニューアルしたてですべてLED照明という最新型。逆に職場がある西口はいまだに電球という現実。当然西口が計画停電の「餌食」になってしまい、私同様にそのスタバへと寄ってくる人はたくさんいた。計画停電中にスタバの窓から灯りがすべて落ちたロータリー付近を見ながらドリンクを味わうのが、意地悪ながらも幸せなひとときだった。もしかしたら、私が東日本大震災を思い出すときに真っ先に浮かぶ思い出はこれかもしれないな、ちょっとひどいけど。

しかし、計画停電で嫌な思い出もある。

当時、私は熊谷の派遣会社の案件で埼玉に一番近い茨城県の小さな工業団地へ飛ばされるが多かったが、ある日の夕方にマイクロバスでそこから熊谷まで戻ろうと向かっているとき、急に車窓が暗くなったりで怖くなった。もともと座席部を点灯しないで走っているだけに「運転手、大丈夫かよ？」と不安がることは何回もあった。それもそのはず、埼玉でもかなり東の加須（かぞ）・幸手（さつて）辺りは関東で甚大被災となった茨城県に程近いからかあちこちで地割れがあった。だからいくらヘッドライトがあっても心配してしまうのは当然だろう。

また、現場で震度4の余震を喰らったのも忘れてはいけない。

東日本以前に被災経験がある私はいち早く机の下に隠れて震動がおさまるのを待っていたが、そのリアクションを現場の若い社員たちに笑われて「早くそこから逃げたい」と何度思ったか。今でこそ神戸市では毎年の成人式と1月17日に「シェイクアウト訓練」というものが行われているが、この訓練は単に机の下に潜るなどの行動ではなく、

「まず低く（Drop!）・頭を低く（Cover!）・動かない（Hold on!）」

たったこれだけ。変に走り回ったりといったジタバタなんてしなくてもいいのだ。その当時の私の行動を嘲笑（わら）った社員たちはその後の避難訓練とかでそれを後悔するがよい。

自分の身は自分で守る（自助）・近隣に協力してもらう（共助）・公的機関に助けを求める（公助）……それが災害時の生存への第一歩である。阪神淡路大震災の教訓から生まれたいのちの3ステップは、現代の災害に於いての最善のフォーマットとなっている。良くも悪くもうちの震災での何もかもが新潟や東日本以降の甚大災害に活かされている。それで「嬉しい」とは思わないが、お役に立っているという事実を少しは認めなければならないだろうな、たぶん。

習うより慣れろ

昔の人がよく言っていた  
見知らぬ土地での暮らしは  
まさにその連続だ

この地の慣習を受け容れ  
この地の言葉を珍しがり  
この地の人々と上手く付き合った

しかし  
私はそのような流れの中で  
一番大きなものを失った

それは  
かけがえのない  
私の故郷  
この地に移り住むまで  
長年暮らしてきた  
故郷なのだ

二十年前の一月  
幸せな未来が約束された  
人生でいちばん輝こうとしている  
そんな時期に  
あの震災は起こった

お酒の味も  
恋愛の妙味も  
少しずつわかってきた  
そんな時期に……

我が街は壊された

故郷の復興を見届けるか  
新天地で輝ける未来へと歩むか

すごく悩んだ

そんな気持ちで  
神戸を後にしたがゆえに

新しい暮らしの中で  
故郷の記憶が  
どんどん削られていく

このまま  
無いものにされていくのか  
いやいや  
それは勘弁

二十年は長かったか  
短かったかとか  
そんなのどうでもいい

記憶の中の故郷が  
なくなったなら  
またゼロから  
記憶してゆけばいい

私が神戸という存在を  
取り返すためのストーリーは  
今すぐ自分の力で  
始めようじゃないか

本当に神戸の存在を喪失したときは  
永遠に目を開けられなくなったときなのだ

## 故郷回帰へのいしずえ（Side of TAKASAKI・前編）

---

東日本大震災に遭ってからの私は、自分でも嫌になるほどに生への渴望が旺盛になった。阪神淡路大震災当時は結婚を控えていたこともありそのようなことに気付く余裕がなかった。それだけ東日本大震災で受けたダメージは甚大なものだった。現に（ビル自体の被災や計画停電などによる影響で休業または間引き営業で休職させられていたため）職場復帰しても1年は余震への恐れなどによる精神不安定が続いて勤務時間を乗り切るだけで精一杯な日々だった。

その3年近くあとの2014年2月14日、北関東と山梨県を襲った甚大な豪雪に遭遇した。地元の高崎では積雪量が70センチ。雪が降ってもほとんど積もることがない神戸で生まれ育った身としては生まれて初めての景色だ。近所の幹線道路が通行止めになり、買い物は通行止めなのをいいことに車道を堂々と歩いたのを昨日のように思い出している。もう3年かぁ……あの時も（地元ではないが）ガソリンの奪い合いが凄かったな。

そんな「静かでタチの悪い災害」から約2週間後、高崎のレンタルスペース会社から突然、SNSのメッセージボックスにメッセージが入ってきた。内容は

「喬城さんのフォト五行歌（写真に五行歌を掲載するコラボ作品）をタイムラインで拝見して素敵だと思ってお便りしました」

から始まる文面だが、さらに読み進めていくうちに、衝撃的な文面に遭遇した。

「初めまして、私は高崎にあるレンタルスペースの代表です。1階に小さなギャラリーがあり、個展も出来るので出展作家さんを募集しています。よかったら個展を開いてみませんか？」

一瞬、メッセージの文面を疑った。「本当なのか？」と。しかし、邪念を忘れて返信にいそしんだ。

「初めまして、高崎在住の喬城と申します。この度は素晴らしいお話を有難うございます。個展は桐生のレストランで一度やっていますが、高崎ではまだキャリアがありません。で、何を題材にやればいいのでしょうか？」

突然すぎて返信に困った。だが、先方は「題材はこれから考えましょう。よかったら一度会いませんか？」との返信で私を店内へと招き入れる胸のアプローチをしてきた。

（私でいいのかな？）

その日の夜、様々な感情がミキシングされてなかなか眠れなかったのは言うまでもない。

## 故郷回帰へのいしずえ（Side of TAKASAKI・後編）

---

まだ豪雪の爪痕（つめあと）が残る2月の終わりぐらいかの頃、私はコンタクトをしてきた市内のレンタルスペースへ足を運んだが、着いてみてビックリした。なんと昔に通っていた大手ブランドの音楽教室の跡地ではないか！

だが、そのビックリも吹き飛ばすほどに、施設側は歓迎態勢だ。自分のことを「作家先生」として迎えてもらったのは、おそらく生まれて初めてではないか。それまでは「しがない一市民がたまたま趣味でアートに足を踏み入れています」程度の過小評価で活動していただけに、この対応には正直面食らった。

初対面のテーブルにはオファーしてきた本人と若い男子スタッフ。初めて作家としての立場を実感しながらも、まずは自己紹介がわりに「1995年まで神戸にいました」という切り出し方をしてみた。しかしそれが、高崎での初個展への扉を開いたのだ。

「阪神淡路大震災から来年で20年ですか！」

私の話を聞いて代表が思わず前のめりになった。

「やりましょう、神戸を題材にやりましょうよ！」

ちょ、ちょっと待ってよ……自分も「やりましょう」と言っていながら迷いが生まれた。

神戸での記憶がほとんど薄れて、震災での写真も残っていない。だったらどうしたら……。

心配で狼狽（ろうばい）している私を横目に、高崎初個展のプランはどんどん出来上がっていく。それを見ていて私は思い切ってこう言った。

「暖かくなってから神戸へ取材に行ってきます！」

実はここ10年ほど、家族に橋本病を知られたくないという理由で帰神（きしん＝神戸に帰ること）してなくて神戸の現状がわからないままである。それでもこんないいチャンスなんだから活かさないともったいない。

そして高崎での初個展は「神戸」をテーマに現在の姿と震災を題材にした五行歌のコラボ作品を展示する、に着地した。どんなものになるかわからない、だが、以前にとある作家先生が「個展は生もの」とおっしゃっていたのを思い出しては自己プランニングを進めていった。

衝撃のオファーから2ヶ月後。ゴールデンウィークを前にした頃だ。何とか個展の骨格を造るために、私は意を決してご無沙汰状態の神戸へと飛んだ。作家としての責任感を重く受け止めたままで……。

## 故郷回帰へのいしずえ（Side of KOBE・前編）

---

第三幕でも触れたように、それまでの私は阪神淡路大震災に被災したという事実を、知人筋以外にはオープンにするのを控えていた。

「どうせその年は関西での天変地異より東京の大動脈が麻痺したことのほうが重要だもん！」

今思えば、何て偏屈な理由で「逃げ」ていたんだろう。でも、自分にとってはどうでもいいと突き放していた運命の1995年の記憶が、高崎での初個展決定とともにリブート（＝再起動）しだしたのは苦笑を通り越して嘲笑したくなる。ともあれ、私は施設との約束どおりに高崎駅東口発着で夜間高速バスに乗り、京都経由・神戸を目指して旅立った。

旅立つまでにはかなりの紆余曲折があった。

出発の数日前、高崎での開催でありながらも神戸へもアピールしないと意味がない、という理由で思い切って兵庫県最大の地方紙・神戸新聞にコンタクトを試みたが、このような展示会関連がどのカテゴリーかわからず、とりあえず生活文化部へ繋いでもらい、コンタクトの趣旨を説明。だが、あいにくその日は担当が不在。出発までに間に合うようにとお願いした上でひとまず通話を終えた。

それから一日ほどあと、登録されていない携帯電話の着信が入ってきた。留守電へのメッセージも入っていた。

「喬城様の携帯電話でよろしいでしょうか？わたくし、神戸新聞の震災担当の者です」

（し、震災担当記者！？ そんなポストが神戸新聞にはあるのね……）

何とも不可思議な留守電だが、これは例の件に違いない！ 私は思い切ってコールバックをした。

「もしもし、高崎の喬城と申しますが、お電話有難うございます」

今でも思い出せる、あのぎこちない感。そんなことを考えている間に、神戸新聞サイドが「高崎在住で神戸生まれ、近日から神戸が題材の個展を開催することになった」という、生活文化部に託した私のメッセージを受けての返答をしてきた。ついには、

「是非お会いしてお話を伺いたいですが、場所はどこにしますか？」

なんと、取材ばかりか場所指定まで促してきたではないか！

「メリケンパークにある、壊れたままの波止場があるところ……名前は忘れましたが」

約10年ぶりの帰神だけにベタに「ポートタワー」と答えるところを、こう返した。それには個展に繋がる重要な理由があった。

## 故郷回帰へのいしずえ (Side of KOBE・中編)

---

10年ほど帰省していないなら、そりゃあ何が新設されたとかわかるわけがない。

私は神戸新聞へのコンタクトを前に、ネットで個展に繋がるような現在の神戸の情報収集に躍起になっていた。すると、次々に私が去った後にできた震災関連施設の数々が登場し、さながら浦島太郎状態で目が点だ。

(人と防災未来センター、震災メモリアルパーク……そんなんがあるんや！)

結婚して離れる頃は、まだ復興というより復旧という意味合いが強かっただけに現在の神戸を理解するにはかなりの時間がかかった。それだけに今の神戸をこの目で見て、1995年の記憶を織り込みながら新作書き下ろしとして発表してみよう……そのような経緯から、私は神戸新聞の記者との待ち合わせ場所を震災メモリアルパークに指定したのである。

そして迎えた神戸新聞との初対面の日。待ち合わせ場所に向かう前に取材で人と防災未来センター(以下「ひとぼう」)を初訪問、想像以上に胸に迫るものがあった。どういうものかは説明にかなりの量の紙面を割きたくるので、「人と防災未来センター」で検索してお確かめいただきたい、そして訪問してほしい。ひとぼうから市バスで三宮へと移動する前に神戸新聞の記者……仮に「増田記者」としよう。その増田記者に電話をかけたが、留守電になった。実は事前に合流する時間が決まっていなく(待ち合わせ時間は当日の都合を見て決めると言っていたので)、

「今、ひとぼうを出て市バスで三宮に向かうところです」

とのメッセージを入れて、市バスを待っていた……と、その時着信が。増田記者だ！

「もしもし、神戸新聞の増田と申します。今、ひとぼうにいるんですか？」

「あ、喬城です、こんにちは。そうです、ひとぼうを出て三宮行きの市バスを待っているところです」

「そうですか。それじゃ、何時に待ち合わせしますか？」

「う～ん、三宮でお昼してからだから14時ぐらいですかね？」

「了解しました。それじゃ、久しぶりの神戸ランチを楽しんでくださいね」

会話を終えようとしていた頃にちょうど市バスがひとぼう前のバス停に滑り込み、私は三宮へと移動した。三宮に着き、これまた10年ぐらいぶりの神戸でのランチへ。事前に予約していた地元の神戸牛グリルのチェーン店だが、神戸牛を取り扱っているのにコースランチのお値段がすごくリーズナブル！せっかくだからと予約していた。結果、この選択は大正解、その後急遽神戸へと旅行に出掛けると決めた知人へのランチアドバイスにも役立ったから、いかに大当たりかがうかがえるだろう。

ランチを終え、待ち合わせの震災メモリアルパークへ。しかし、そこまでの行動で私は大きなミスをやらかした。10年のブランク、恐るべし。



## 故郷回帰へのいしずえ（Side of KOBE・後編）

---

震災メモリアルパークへのアクセスは、メリケンパークだから地下鉄のハーバーランド駅が最適だろう。神戸を離れてからかなりの時間が経過しているからか、神戸市営地下鉄は地元を走る西神・山手線を主に利用していたため、2001年に新設された海岸線の駅名をほとんど把握していない。それゆえに事件は発生した。

そのハーバーランド駅（JR神戸駅・神戸高速・高速神戸駅と直結）まで海岸線に乗り、下車してからメリケンパーク方面へと向かっていったが、時計を見ると14時を軽く超えていた。

（うわあ~~~~、やってもたわ！）

歩みが商業施設群へと到達しかかっていたとき、増田記者から着信が入ってきた。

「もしもし増田です。今、どこに居はるんですか？」

「すみません、今『モザイク』の手前の商業施設にいます。震災メモリアルパークになかなか着きません」本当にどうしようもない状況だっただけに、電話の向こうの増田記者が「え~~~~~っ!？」と蒼ざめていたようだ。だが、せっかくのお約束だからと待ち時間を延ばしてくれた。増田記者には本当に申し訳ない気持ちでいっぱいだ。

まだ徒歩ナビどころかスマホも無く、看板探しや人への聞き込みをしながらハーバーランド駅から歩くこと約30分、息絶え絶えになりながら震災メモリアルパークに到着。それらしい人が居ないぞ、と、恐る恐る中に入っていくと、カメラを片手に立っている男性の姿が。これはもしかして……

「お疲れさんです、初めまして。神戸新聞の増田です」

やっと増田さんと出逢えた！！

私はお近づきのしるしにと高崎から持ってきた有名菓子メーカーのラスクを増田記者に手渡した。

合流していきなり阪神淡路大震災の被災体験についての質問が飛んできた。高崎で出さないでおこうとフタをし続けてきた話題だけにどう答えたらいいのか戸惑ったが、神戸独特の壮大な景色に背中を押されるようにゆっくりと話し始めてからは、全身の力が自然と抜けていった。

インタビューを続けながら増田記者は、目の前にある傷ついたままの岸壁を紹介してきた。まさか被災したままを遺しているなんて全く知らなかっただけに、そのビジュアルの衝撃度の大きさをや。

ネットで調べたところ、このパークは1997年に開設したものらしい。そりゃ私が知らないわけだ。

インタビューのあと、増田記者は「よかったら写真を撮るポーズとかしてもらえますか？」と私に撮影風景場面のポージングをお願いしてきた。レンズの方向は、もちろん被災した岸壁だ。

（胸が痛い、でもこれが現実だ！）

何度も心が折れそうになりながらも、増田記者が一眼のシャッターを切っている限りは「震災関連施設の取材中」という設定で要望に応え続けた。

撮影の後増田記者と震災や神戸について色々と話しているうちに、気が付けばもう黄昏（たそがれ）になっていた。ここで増田記者とはしばしの別れ。「帰神するときにはまた連絡します」と言い残して、私はハーバーランド駅ではなく、同じ海岸線の「みなと元町」駅を目指して次の予定地へと歩いていった。

実は合流ついでに増田記者から震災メモリアルパークの最寄り駅が違うという指摘を受けた。そのみなと元町駅が最短だが、私はその駅の存在を知らなかったから増田記者を約一時間も待たせてしまったのである。

情けない神戸新聞デビューとなったが、結果的にはこの大失態からの取材が一ヵ月後に大きな流れを呼び込むことになる。それは高崎に帰ってきてから。詳細は次のエピソードにて。

## 先手必勝・大手地元紙デビューまでの物語

---

激動の神戸取材と神戸新聞デビューから約一ヶ月後。個展まで時間がなくバタバタしていた頃、また見慣れない携帯番号からの着信が入った。留守電を聞くと、今度は上毛新聞の記者からである。仮にこの記者を岡本記者としよう。

「喬城さんの携帯でよろしいでしょうか？わたくし上毛新聞の岡本と申します。神戸新聞で高崎での個展開催の記事を拝見させていただきました。ぜひ取材させていただきますか？」

神戸新聞には私が「売り込む」かたちでデビューとなったが、岡本記者はなぜ神戸新聞を見て私にオファーしたのだろうか？早速コールバックしてみた。

「はい、岡本です」

「高崎の喬城と申しますが……」

「あ~~~~~、喬城さんですね！はじめまして、岡本です」

「まさか神戸新聞を見てお電話をいただけるとは思いませんでした。逆に私のほうがビックリです」

ほどなく会話していくうちに、話題は本題である高崎初個展の取材予約へ。場所は会場であるレンタルスペースビルの1階ロビー、ということで話はまとまった。

迎えた上毛新聞初取材の日。思ったよりも若い年齢の記者ではないか、出会い頭からビックリだ！

だが、驚いたのはこれだけではなかった。それは岡本記者の過去話である。

「実は大学時代、神戸に数年住んでいた時期がありました。その頃から神戸新聞を Web で愛読していてね、喬城さんの記事もたまたま神戸新聞で見つけたんですよ」

意外や意外！岡本記者自身が一時期の「神戸っ子」だったことが判明した。しかし、本当の驚きはこれからである。

「その記事を見たとき、私は『(先を越されて)悔しい』と思いました。『この記事は先に自分が書きたかった』とね。だから、上毛の誰かに取られる前に自分が記事にしたいと思い、今日に至ったわけです」

なんという執念！！私が悪戦苦闘しながら売り込んで掲載に至ったあの神戸新聞デビューが岡本記者を突き動かしたというのだ。その流れから取材へと移り、なぜか神戸の学生街（実は神戸スイーツの激戦区でもある）の美味しいカステラまでいただいた。こんなに感動的な取材の場面は初めてだ。まさかこんなところで神戸との縁がある人と出逢うとは思わなかった。

岡本記者とのセンセーショナルな出逢いの感激は私の一億馬力となった。取材前日までは（本格的なギャラリーでの開催に対する）不安や悩みが山積していたのに、ほんの数時間のひとときだけでそれらが軽減できた感じがする。

実は私の新聞掲載デビューは桐生の夕刊専門紙「桐生タイムス」で2013年の夏（これについてものちほど詳細を書く）。上毛新聞でもデビューを果たしたあとは無事に展示作などの搬入を終えて代表らの手助けをいただきながら開幕の日を迎えたが、これまた思いがけない一大事が起きたのである。まさに「個展は生もの」なのだ。

## 逃れられない現実～嵐のような初日～

---

神戸新聞に続き、地元の上毛新聞にまで採り上げてもらったのを力に、高崎での初個展「KOBE ～今こそ神戸～」は無事に開幕した。だが、私はあいにく4日間のみ短期派遣を強引に入れられ、初日どころではなかった。

その状況が思わぬハプニングを産んでしまったのである。

その頃、主催の私自身は高崎と前橋との境目にある工場の中。ちょうどお昼時を迎えていた。コンビニで調達した弁当を食べ終えてやっと一段落……という気分になろうとしたその時。レンタルスペース店のスタッフから着信が入った。

「喬城さん、こんにちは。実はいま群馬テレビさんが取材でお見えになっています。うちで展示の様様を撮影されていましたが、どうしても作者さんからお話をお伺いしたいとのことです」

こ、これってどういうこと!?

そう考える間を与えず、スタッフは群馬テレビの担当者の電話番号を私に伝えてすぐに通話を終了してしまった。

仕方がない、展示会のテーマがテーマだからそういう流れになったのだ。そう言い聞かせながらスタッフから教わった電話番号に即行でアクセスした。

「はい、群馬テレビです」

「高崎の喬城と申します。高崎の会場からそちらさまの電話番号をお伺いしたのでお電話いたしました。有難うございます。我々は主催者である喬城さんのお声を頂戴したく、インタビューをさせていただきたいのですが、今はどこにいらっしゃいますか？」

昼休み中だからか、自分に関する重大な電話だったのに聞いていても半分上の空だったが、それでもお越しになるのならと、私は派遣先の所在地を伝えて通話を終わらせた。しかし、その後の流れは想像を絶するものだった。

様子を見に外に出ると、既に群馬テレビのカメラクルーと若い男性アナウンサーがスタンバイを始めていた。

(まずい、何もかもがまずい!!)

だが、すべてが整ってあとは私を迎えるだけ、という景色が出来上がっていた。いろいろな不安で潰れそうな心境の中、しかもその日はのちに雷雨となるほどの気の早い猛暑という異常気象の中、インタビューは始まった。「何もかもがまずい」の真意のひとつは赤みがひどいスッピンなのだ。それでもカメラは無情なほどにただ回り続けている。マイクもしっかり私に向けられている。

「今回の展示でお伝えしたいメッセージとかはありますか？」

いきなり来た、その質問。しかし、私は大きく深呼吸しながらゆっくりとこう答えた。

「阪神淡路大震災から来年で20年なので、この今にこそ神戸へ目を向けていただける機会になればと願っています」

その他色々質問はあったが、のちにオンエアで流れたのはこの部分だった。オンエアの画面にいる自分が何とも見苦しいものだったのは今からでも消したい記憶だ。改めて自分はテレビに向いていないと実感した、数分間の嵐のような出来事であった。前述の通りその数分後、本当に嵐になるとは思わなかったが。余談だが、当時の若いアナウンサーは、今や群馬テレビのエースアナウンサーとして活躍している。しかし、その活躍ぶりを見ていても、私にはあの突発的な派遣先でのハプニングしか浮かばない。彼には本当に申し訳ない気分だ。

## ある覚悟への布石

---

怒涛の群馬テレビデビューから数時間後、仕事が早く終わった私は初日の個展会場へ。やっとの初在廊だ。ご来訪者からのメッセージとか書いてあるかなどをチェックしたり、会場関係者によるギャラリーの仕上げに惚れ惚れしたりと、個展ならではの、主催ならではの心地よい空気感や緊張感を満喫した。私が前月の神戸滞在中に詠んでコラボしたフォト五行歌作品への感想とかもメッセージに書かれていて

「この程度の作品なのに感動してくれる人がいるんだ」

と、いたく感激したり……それだけでもこの催しを企画した意義と意味を実感できた。

会期中の日曜の午後、上毛新聞の岡本記者も私服でご来訪。彼の出現で私は一気に緊張が走った。

「喬城さんがこれを開催することには意味があるんですよ」

その言葉に、私の胸が鋭角に何かで抉（えぐ）られたような衝撃を感じた。どう表現したらいいかわからないほど、私が群馬で神戸を、阪神淡路大震災を伝えることには何らかの意義があるのだと、その時初めて自覚した気がする。確かにここで展示しているのは現在の神戸だ。だが、現在の神戸の写真に添えた五行歌は震災を題材にしたもの。被災後、大変な思いをした人には「広く浅く、かつ寄り添う」を心掛けるのがベストと、東日本大震災以降に SNS でよく発信されていた言葉だが、敢えて「寄り添わない」作品にしたことで逆に群馬の人たちの心を掴んだのではないか。そんな気がした。

無事に約一週間の会期を終了させ、高崎での初個展は成功となった。そして、この個展である覚悟を問われた。

実はこの個展開催にあたり、震災と神戸という重厚なテーマだけにご来訪者の反応を見ようとそれなりの設問を数個作ってアンケートを試みた。様々な意見、個展への感想や要望、阪神淡路大震災への意識やメッセージなど……目を通していても涙を誘う回答もあり、心が大きく揺さぶられた。

（震災を伝える、記憶する）

特別大きなことはしなくても、私は自分の体験を伝えればいいのだ。だが、まだ、まだ確信が持てない。その答えが何なのかわからないまま、季節は入梅になった。

そんな中、ある公募の情報を関西在住の知人から教えてもらった。

（へえ～、『震災川柳』かあ……）

だが、その情報がまたひとつ運命を拓くことになるのを、その時は予測すらできなかった。